スペシャルインタビュー
Fabien Prioville ファビアン プリオヴィル

フランス出身ダンサー、振付家
ラララ ヒューマンステップス、
ピナ・バウシュ ヴッパタール舞踊団で活躍後
Fabien Prioville dance Companyを率いる
ドイツのヴッパタール市を拠点に世界で活躍中
日本で演劇集団 円 の公演に携わるなどジャンルを超えて
舞台芸術の画期的な試みに取組んでいる

1、今回のタクトとのクリエイションについてどんなことを感じますか？

今回のクリエイションは挑戦であり、しかも実りが大きいものでした。
目標に向かって進んでいき、そして形になりました。
タクトのメンバーにとっても自分の考えを他人にどのようにしたら
伝えられるかということが挑戦でした。

2、今回の TACT はシニアのグループですが、普段のクリエイションと何か違うことはありますか？

1 番はっきりしているのは年齢です。年をとれば当然私がどのようにしたいか
の説明の仕方も違ってくるし、リズムもずっと遅くなってきます。
振付家、そしてディレクターとして考え方も違ってくるし、振付も当然変わってきます。一つの場面でどれくらい集中が続くかということや、どのくらいの動きや体力があるか、若者はずっとエネルギーがあるので、そのあたりが違うと思います。

3、NPO 法人バレエノアのために創った作品の中で、特に印象深いものはなんですか？

特に印象深いものと言ってもたくさんの作品があり、それぞれ出演者も違うので、比較はできませんが、
敢えて言うならば、1 番気に入っている作品は『紙ひこうき』※です。

アシスタント瀬山亜津咲と

4、今後の NPO 法人バレエノアと TACT に期待することはなんですか？

違ったアーティストとの出会いや、違ったタイプの作品を経験したり、
違った人々との交わりを通して、たくさんのものを学んでほしいです。
また、それらの体験を今後の活動に活かしてほしいです。

5、今回の作品「21grams of a happiness」について何かメッセージはありますか？

沢山の人に見てほしい。
年をとるということは色々な機会が増していきます。人生というのはサイクルだが新しい出発の時でもあります。リタイアするということはたくさんの時間を持てるということであり、新しい経験を積んだりできます。この作品は一種の彼らの人生の始まりでもあります。年とともに体力的な能力は失われてくるし、精神的にも同じです。
シニアの人たちが思っている以上に驚くべき表現をしているので見てほしい。見ている人の心が動かされる事を望んでいます。

※『紙ひこうき』
2020年9月 金沢21世紀美術館で改訂版の上演が決まっている。

ファビアン・プリオヴィルがバレエノアのために振り付けたコンテンポラリーダンスの作品。
2008年 彩の国さいたま芸術劇場で初演後、東京でも公演を行った。
その後ドイツのヴッパタール市で開催されたピナ・バウシュ国際ダンスフェスティバル及びビーレフェスト市で開催されたダンスフェスティバル招待され公演。国内外で７回の公演を行った。
2016年には新メンバーによる短編改訂版を東京都豊島区のあうるすぽっとで上演した。
若い世代が体験する葛藤やいじめの問題に切り込んだ舞台作品ということで高い評価を得た作品。